

大衆教養主義知識人はいかにして誕生したのか

—柳田謙十郎のライフコースを通して—

西澤 直大

本稿の目的は、戦後日本における大衆教養主義を牽引した知識人はどのようにして成立したのかを明らかにすることである。分析対象として、大衆教養主義知識人の代表格とされる哲学者・柳田謙十郎を扱い、彼のライフコースから読み解く。

進学への葛藤

謙十郎は1893年に神奈川県に生まれた。地元で中学校が新設されたこともあり進学を希望していたが、長男として家を継ぐことを期待され、父の反対に遭った。そこで謙十郎は家出を試みるなどの抵抗を示し、最終的には師範学校へと進学することとなる。

師範学校は初等学校教員の養成を目的とする教育機関であったが、謙十郎は小学校教諭を志して師範学校に進学したわけではなかった。そのため、師範学校の教育に馴染むことができず、上級学校である高等師範学校への進学も断念することとなる。進学の道が閉ざされた以上、就職する以外に選択肢はなく、謙十郎はやむを得ず小学校教諭になった。当時、小学校教諭は公務員の中でも最下級の位置づけにあり、待遇も低賃金であった。さらに休日には父の仕事を手伝うなど、百姓半分・教員半分の中途半端な生活を送っていた。現状を打開すべく、中等教員の検定試験を目指して勉学に励むようになる。

中等教員検定試験は合格率が低く、決して容易に合格できるものではなかった。しかし謙十郎は「修身科」、「教育学」、「法制及び経済」の3科目において資格を取得することに成功した。中等教員検定試験は、謙十郎のような家庭の事情などによって上級学校への進学が叶わなかった者にとって、勉学に励む明確な目的となり、立身出世を可能にする装置であった¹。

哲学への興味

その後、謙十郎は小学校校長などを歴任したのち、岡山師範学校、盛岡師範学校の教諭と

1 天野郁夫『大学の誕生(上)』中公新書、2009年、274頁